

`\bibitem{宮本 2}`← リスト六つ目

宮本 健作, 芝崎 朱美 (1993): “母音波形から見た風邪嚔声と喉頭癌嚔声の視覚的特徴”, 日本心理学会第 57 回大会発表論文集 pp273.

`\end{thebibliography}` ← 参考文献終わり

`\end{document}`

例題 12-1 で、`\begin{thebibliography}{9}`の`{9}`は、参考文献の番号の桁数をあらわしています。一桁の場合、`{9}`、二桁の場合`{99}`、三桁なら`{999}`となります。この数字は桁数を表すだけなので、他の数字でもかまいません。最終的な文献の数がわからないときには、`{9999}`としておきます。

2.5.2 参考文献の相互参照

文中での相互参照は、例題 12-2 のように入力します。

例題 12-2

(入力)

`%\test12-2`

`\documentclass{jarticle}`

`\begin{document}`

`\section{音声の印象評価とグルーピング}`

これまで、音楽心理学においては聴取印象に関する多くの研究が報告されてきた`\cite{音心}``\cite{階層}`。概して、聴取対象がクラシック音楽や楽器音などとしているために、人の話しことばの音声に対する評価語として必ずしも適切でないと思われることばも使われている傾向がある。それゆえ本研究では先行調査を行った結果、話しことば音声の印象表現にふさわしい語として、表`\ref{評価語}`に示すような形容詞を得た`\cite{修論}`。

これらの評価語を用いて、音声を聴取した際にどのような印象を抱くのかを具体的にしらべることを目的に聴取実験を試みた。

`\end{document}`

このようにしておけば、参考文献リストが途中で加除されても、順番が変わっても引用番号を気にすることはありません。`TeX`の方で自動的に番号を付けてくれるからです。

また、第 2.3.3 節 (21 ページ) でも同じでしたが、`\bibitem{...}`のなかに書き込むラベルは、大文字と小文字を区別します。さらに、コンパイルは最低 2 回行わないと、正しい参照ができません。

複数の参考文献を参照する場合、文中での相互参照は、例題 12-3 のようにラベルをカンマで区切ります。

例題 12-3

(入力)

`%\test12-3`

`\documentclass{jarticle}`

```
\begin{document}
```

多くの研究が報告されてきた~\cite{音心, 階層}。

```
\end{document}
```

カンマの前後には、空白を入れなくても、出力では、半角スペースが入ります。
では、例題で試してください。